

社会形成力を育成する中学校社会科の授業開発Ⅱ

—小单元「戦争か平和か - 高屋敷館遺跡の時代」の場合—

七戸将光 平川市立平賀東中学校

要旨

現在の「社会科」は、子どもにとって学ぶ意義の薄いものとなっている。この状況を打破するにはどのような授業開発を行うべきであろうか。筆者は、社会形成力を育成する社会科授業であるとする。そのため、青森市浪岡地区から出土した高屋敷館遺跡を題材に授業構成原理の具体化を図る。本遺跡に関して歴史学界では、環濠及び土塁の性格づけに関して論争が存在した。つまり本集落を防御性集落と見なすか、それとも囲郭集落とみなすか、というものである。この論点について子どもに学説を選択させ、子どもなりの議論を作らせる。その上で子ども自身の議論について討論を行い、対立する学説のいずれの根拠を重視すると反対の学説を認めることが可能か考えさせる。最後に討論を踏まえて、改めて子どもにいずれの学説を選択するか、意思決定させて授業を終了する。続いて討論を経た子どもの思考状況を概観する。その結果、4つに類型化することができた。

【キーワード】 社会形成力 討論 トゥールミン図式 高屋敷館遺跡 防御性集落 囲郭集落

1 はじめに

現在の「社会科」は、子どもにとって学ぶ意義の薄いものとなっている。それは子どもから、「歴史って何で勉強するの?」「社会科を勉強して将来何に役立つの?」という疑問を常日頃投げかけられることから明らかである。つまり現在の「社会科」授業は、子どもにとって意義のあるものとなっていないといえることができる。このような状況を打破するにはどのような授業開発を行うべきであろうか。

そこで筆者は、かつて本来目指すべき社会科授業を、子どもが民主主義の原理に則り、主体的に話し合い、その追求によって自らの思考を変容させていくものとしてきた。これを社会形成力とする¹⁾。その概略は、次の通りである。

現代社会は民主主義社会である。この社会は、これまで論争問題や社会問題とされる、その時々の問題を解決することにより、社会を今日まで作り上げてきた。その際の解決方法は議論である。議論を通して対立する見解を批判、吟味・検討し、一つの見解を議論の参加者全員で作上げる。あるいは議論に留保条件を付け、折り合いを付ける、ということを行ってきたのである²⁾。

このような社会形成力を育成する社会科授業が必要とされているのである。それでは、これまでの研究をふまえ³⁾、民主主義社会の原理を身に付けさせるにはどのような社会科授業を開発すればよいのであろうか。

そこで筆者は、高屋敷館遺跡を題材に授業構成原理⁴⁾の具体化を図るものである⁵⁾。この遺跡は近年発掘調査が行われた⁶⁾。その後、遺跡の性格付けを巡り激しい論争が発生した⁷⁾。その論争点は、防御性集落なのか、囲郭集落なのか、である。

以後、本研究は次の通り行う。まず高屋敷館遺跡を教材に単元構成を行う。続いて、子どもが議論する段階を中心とした授業構成を行う。次に本単元を通じて子どもの思考がどのように変容したか概観し、最後に本小単元の開発を通して残された課題を明らかにする。

2 小単元「戦争か平和か - 高屋敷館遺跡の時代」の開発

(1) 単元設定の理由

通常中学校社会科歴史的分野において、平安期の学習は摂関政治や国風文化を中心とした内容で構成される。そこでは藤原一族による政治ときらびやかな国風文化とともに、地方政治が乱れたことを学習する。平安初期の征夷政策と武士が台頭する狭間の時期にあって、身近な地域である青森県域においてどのような歴史が存在していたのかは学習することとはなかった。しかしながら近年行われた平安期の埋蔵文化財の発掘調査により、そのような事態は一変した。特に高屋敷館遺跡の出現により、平安期の当地方においても歴史は存在し、しかもそれはこれまでの常識を覆すものであった。

高屋敷館遺跡は、青森市浪岡地区（旧浪岡町）で出土した、平安時代後半に最盛期を迎えた大規模な環濠集落である。この遺跡は、周囲に大規模な環濠をめぐらしていることにより注目された。その環濠は、戦争の時代とされる弥生時代の集落に多く見られる環濠と同様の形式のものである。すなわち掘り上げた土を濠の外側に盛り上げて土塁を形成し、外から敵が侵入してくることを防ぐ役割を果たすとされている。ここから平安時代の当地方は、戦争状態にあったのではないかと推測されている。

しかしながら正史などには当地方に関する記述が皆無である。そこで歴史研究者は本遺跡のような環濠集落の性格を検討することにより、平安時代後半の当地方の実態に関して究明しようとし、論争が展開されている。つまり敵との戦いを行うための「防御性集落」であるか否か、という論争である。この論争により当地方の歴史研究は飛躍的に進展した。

そこで地域教材として高屋敷館遺跡を用いることとする。それは当遺跡の最盛期が摂関政治の最盛期に近い時期であり、摂関期に当地方でどのような歴史が存在していたか学習するとともに、生徒にとって歴史的事象を身近なものとすることができるためである。

(2) 単元計画

本単元は、導入、展開1、2、3、終結の4つのパートからなっている。各パートは、以下のような役割を持っている。

- 導 入 論争問題の提示
- 展開1 学説①（防御性集落説）の分析
- 展開2 学説②（囲郭集落説）の分析
- 展開3 論点の明確化と留保条件の設定
- 終 結 論争に対する意思決定

(3) 単元における認識内容

本単元は、本遺跡に関する研究成果をふまえて構成されている。歴史学では本遺跡を「防御性集落」とするか、あるいは「防御性集落」としないか、という二つの学説がある。そこで本単元の「展開1・2」で、子どもには本遺跡について二つの見方があることを認識させる。「展開3」では両論の論争点を明確化した上で、対立する学説について留保条件を導き出させる。終結では子ども個人にいずれの学説に賛同するか、意思決定させるよう組織した。

「展開1」は、「防御性集落」論の学説を理解するパートとなる。ここでは遺跡出土の遺構・遺物は、外敵の侵入を防ぐためのものであるという学説が基本である。

「展開2」は、「防御性集落」論に反対の学説を理解するパートとなる。ここでは「防御性集落」論が立脚する根拠が、必ずしも外敵の侵入を防ぐためのものとは言えないとする考え方が基本にある。

以上のような歴史学研究の成果に依拠した認識内容は、歴史事象を分析する際、子どもに科学的な視点を提供するものになると考えられる。

(4) 単元の展開構造

単元計画を、「導入」「展開 1」「展開 2」「展開 3」「終結」の 5 つのパートから組織した。

「導入」は、論争問題の提示のパートである。高屋敷館遺跡出土の環濠の役割を巡って「防御性集落」か否かという論争が紹介され、中心発問「高屋敷館遺跡の代は、戦争だったか、平和だったか」を提示する。

「展開 1・2」は、まずそれぞれの学説の根拠になっている遺構・遺物を確認する。これらの遺構・遺物から「防御性集落」か否か、の主張を分析する。これらの学説から「戦争の時代」だったか、「平和な時代」だったか、についての理由を子どもに探らせる。

「展開 3」は 2 段階で構成している。まず「展開 1・2」をふまえて、子どもがいずれかの学説に立脚して、各学説について賛否を討論する。続いて相対立する学説が成立する理由を思考させる。つまり「防御性集落」論や「戦争の時代」の学説を支持する子どもが、どの根拠を重視すると反対の考え方が成り立つかを思考させるのである。最後の「終結」では、どのような理由を重視すると「防御性集落」論や「戦争の時代」の考え方が妥当であるか、意思決定させ学習を終了させる。

3 小単元「戦争か、平和か—高屋敷館遺跡の時代」の展開

(1) 主題：「高屋敷館遺跡の時代は、戦争だったか、平和だったか」

(2) 目標

① 高屋敷館遺跡を事例に、以下の知識を習得することで、当該遺跡の存在時期の北奥地域が戦時であったか平時であったかについて吟味・判断する。

A 高屋敷館遺跡は濠や鉄鍬などの遺構・遺物や同時期の類似の遺跡から、「防御性集落」と規定する主張がある。この立場では該期の北奥地域は戦時であったとされている。

B 高屋敷館遺跡は濠の区画性や同時期の一般的な遺跡の鉄鍬に関する数量的分析との比較、宗教的出土遺物により、単なる「環濠・囲郭集落」と規定する主張がある。この立場では該期の北奥地域は平時であったとされている。

② 高屋敷館遺跡を「防御性集落」と規定するための条件を吟味・判断する過程で以下の能力を習得する。

A 資料から必要な情報を読み取り、それらの情報を整理することができる能力。

B 事実の背後にある価値観を読み取ることができる能力。

③ 高屋敷館遺跡を「防御性集落」と規定するための条件を吟味・判断することで以下の態度を身につける。

A 遺跡に関する学説を批判的に見直すことができる態度。

B 自分とは異なる価値観に基づく主張も考慮し、尊重できる態度。

(3) 単元の全体構造（表 1 参照）

(4) 単元の展開 - 展開 3 の場合

① 題材名

「高屋敷館遺跡を『防御性集落』とすることに賛成か反対か話し合おう」

② 本時の目標

- A 高屋敷館遺跡が「防御性集落」であるかどうかや、遺跡の存続した時期に「戦争」があったかどうかについて、グループの中で積極的に話し合おうとする。
- B 高屋敷館遺跡が「防御性集落」であることの整合性や矛盾点をもとに、自分と反対の学説のどの理由を重視すると「戦争」あるいは「平和」な時代といえるか、考えることができる。
- C 遺構や遺物を解釈することにより、高屋敷館遺跡が「防御性集落」であることの整合性や矛盾点を指摘できる。

③ 展開の実際（表2参照）

4 子どもの思考の変容

本小単元実施にともない、子どもの思考がどのように変容したのか概観する。概観するに当たって、子どもが作成したトゥールミン図式の一部を紹介する。子どもはこの図式を2回にわたって作成している。1回目は第4時「高屋敷館遺跡に関する論点の明確化」の冒頭に於いて、2回目は討論後に各説を補強する根拠として弘前市早稲田遺跡と八戸市林ノ前遺跡を紹介した後である。これらは四つの場合に分類できる。第1に「防御性集落」説を支持し続けた場合、第2に「囲郭集落」説を支持し続けた場合、第3に「囲郭集落」説から「防御性集落」説へ変容した場合、第4に「防御性集落」説あるいは「囲郭集落」説から両説支持に変容した場合である。

(1) 「防御性集落」説を支持し続けた場合

この立場の生徒のトゥールミン図式は、図1である。これによれば、濠や土塁、鍛冶遺構、大型たて穴住居という事実をもとに、敵からの攻撃に備え、集落のリーダー（指導者）を中心として集落がまとまったり、武器を製造したりしているとしている。「展開1」において提示された「防御性集落」説を主張する研究者の学説を支持していることになる。さらにこの生徒は、「展開2」でこの立場を補強する事実として提示された八戸市林ノ前遺跡出土の竈に頭部を載せている人骨の状況から、「防御性集落」であると重ねて主張している。

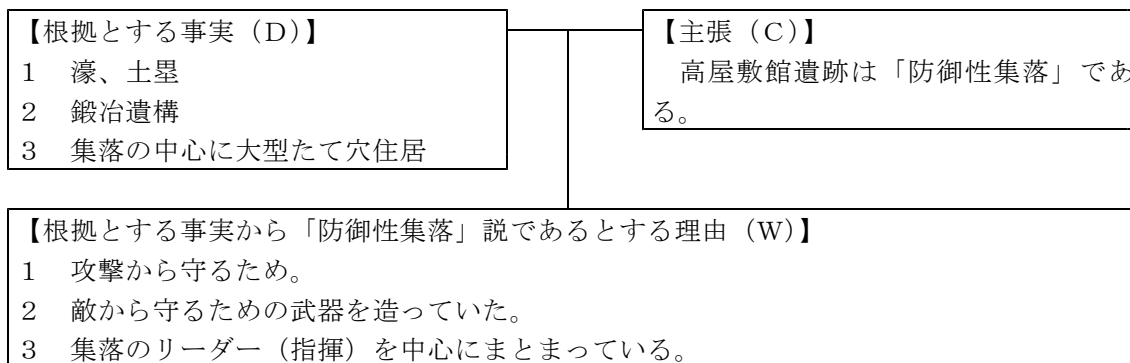


図1 「防御性集落」説に立つ生徒のトゥールミン図式（筆者による転写）

(2) 「囲郭集落」説を支持し続けた場合

この立場の生徒のトゥールミン図式は、図2である。これによれば、土製品や銅製品、錫杖（状鉄製品）という事実をもとに、アクセサリーを楽しんだり宗教的儀式を行ったりと、特別な場にするための遺跡であるとしている。「展開2」において提示された「囲郭集落」説を主張する研究者の学説を支持していることになる。さらにこの生徒は、「展開2」でこの立場を補強する事実として提示された弘前市早稲田遺跡の土溝から、「防御性集落」ではないと主張している。

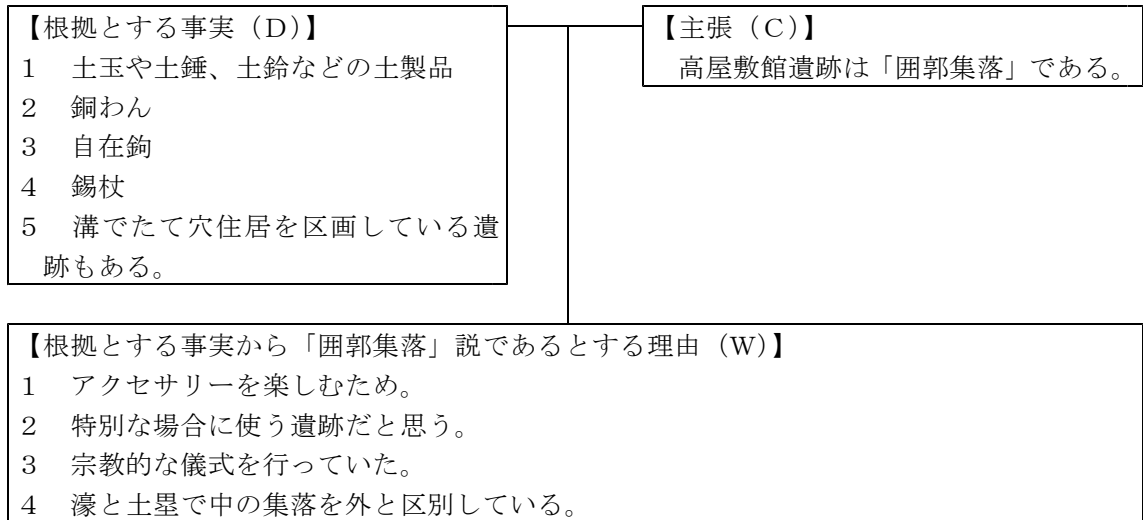


図2 「囲郭集落」説に立つ生徒のトゥールミン図式（筆者による転写）

(3) 「囲郭集落」説から「防御性集落」説へ変容した場合

当初「囲郭集落」説を支持したある子どもは、前項(2)と同様の記述のトゥールミン図式を作成した。八戸市林ノ前遺跡から出土した人骨を見て「死体に鉄鏃」があることや頭部を竈に載せていることから、子どもは青森市浪岡地区高屋敷館遺跡の土塁と濠の組み合わせを、「防御性集落」説に有利な事実と判断した。

(4) 「防御性集落」説あるいは「囲郭集落」説から、両説支持に変容した場合

子どもが当初作成したトゥールミン図式は、前項(1)及び(2)と同様のものである。しかしながら、対立する各説の根拠とする事実を補充して紹介されると、どちらの場合もあり得るとし、両説支持に変更する子どもも現れた。

以上、子どもが作成したトゥールミン図式を概観したところ、4つの場合に類型化することができた。そこから子どもは選択した学説に関して、子ども自身が必要に応じ資料にもとづき自説を強化している状況を読み取ることができた。

5 おわりに

本研究は、子どもに民主主義社会の原理を身に付けさせる授業の開発を行った。それは社会形成力を育成する授業構成原理に則り、実際に論争を展開した高屋敷館遺跡を取り上ることにより具体化した。そこでは、子どもに研究者の対立する見解をなぞらせた上で、討論させるものであった。

本研究が有効であったか否かは、不明である。それは、折からの新型インフルエンザ騒動に筆者の勤務校も巻きこまれ、授業を集中的かつ連続的に行うことができず、子どもの思考が寸断されてしまったためである。そのような中であっても、子どもたちは本単元に真摯に取り組んでくれた。それは「どちらか迷ったけど、やっぱりどっちも言えるので、両方が考えられる。なるほどと思ったこともあって驚いた。」「最初は囲郭だと思ったが、死体があるから防御性だと思う。」などの感想から伺えるものである。

今後は機会を捉え、検証授業を実施し、かつ詳細な授業分析を行うことが課題として残された。

【参考文献】

脚註や表 1 に引用したもの以外に、以下の文献を参照した。

井出靖夫「十・十一世紀東北北部における集落区画の意義」

齋藤淳「北奥における生業活動の地域性について」

齋藤利男『『北の古代末期防御性集落』の成立・発展・消滅と王朝国家』

三浦圭介「津軽地方における古代社会の変質とその様相 - 特に九世紀後半から十世紀前半にかけての変質について - 」

いずれも天野哲也・小野裕子編『古代からアイヌへ』吉川弘文館、2007、所収。

-
- 1) 池野範男「批判主義の社会科」全国社会科教育学会『社会科研究』No. 50、1999
池野範男「社会形成力の形成 - 市民教育としての社会科」日本社会科教育学会『社会科教育研究 2000 年度年報』2001
拙稿「社会形成力を育成する中学校社会科の授業開発 - 小单元『弘前（紛紜）事件 - 自由民権運動であるか、否か』の場合」弘前大学教育学部附属教育実践総合センター『弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要』No. 7（通号第 17 号）、pp. 13 - 22. 2009
 - 2) 拙論に対し、このような討論の授業は社会科固有の授業ではないのではないかと、という指摘がある。確かに他教科に於いても討論の授業は多数存在する。しかしながら、拙論に於いては現代社会を民主主義社会とし、討論を通して社会を構築する原理を身に付けさせることを主眼とする。その結果として子どもの考えの変容を図るのである。そのため対象教科は社会科となり、歴史的な分野で取り上げる教材は、民主主義社会の構成原理を身に付けるのにふさわしい論争の存在した問題となるのである。
 - 3) 授業構成原理については以下の研究を参照のこと。
註 1) 及び拙稿「社会形成力を育成する中学校社会科歴史的な分野の授業開発 - 小单元『戦争か平和か - 高屋敷館遺跡の時代』の場合 - 」平成 18 年度弘前大学大学院教育学研究科提出修士論文、2007
 - 4) 註 1 及び註 2 を参照のこと。
 - 5) 今年度発表者は、中学校 1 年生の教科担任となった。そのため 1 年次で履修する歴史的な分野の内容のうち、註 1) 及び註 2 の授業構成原理に該当する教材として高屋敷館遺跡を取り上げることとする。
 - 6) 青森県埋蔵文化財調査センター『高屋敷館遺跡 浪岡バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書』青森県教育委員会、1998
 - 7) 小口雅史「古代北日本の『防御性集落』」歴史科学協議会『歴史評論』No. 657. 2005. pp. 2 - 11.

表 1 単元の全体構造

段階	教師の発問	学習形態	予想されるこどもの反応	資料
導入 第1時	1 子どもに高屋敷館遺跡についての論争を提示する (1) 高屋敷館遺跡とはどのような遺跡か、確認する。 ① この新聞記事は、何についての記事か。 ② どこにある遺跡か。 ③ いつ頃の時代の遺跡か。 (2) 朝廷と東北地方との関係について確認する。 ① 9世紀の朝廷は東北地方の人々に対してどのような政策を行ったか。 ② 摂関政治の時代に、東北地方に対してどのような政策を行ったか。 ③ 高屋敷館遺跡が存在した期間には、東北地方に対してどのような政策が行われたか。 (3) 高屋敷館遺跡の概要を確認する。 ① 高屋敷館遺跡の概要を確認する。 ② この遺構は何か。 (4) 濠が集落に果たす役割を考える。 ① 濠はどのような役割をしていたか。 ② 濠の役割を踏まえて、集落の性格を「〇〇集落」という形式でネーミングする。 ③ 防御性集落や囲郭集落に関連するネーミングをまとめる。 (5) 論争になっていることをMQとする。 ① 濠について論争になっていることは何か。 ② MQを設定する。 「高屋敷館遺跡は、戦争の時代の遺跡か、平和な時代の遺跡か」	一斉	・高屋敷館遺跡 ・青森市浪岡地区 ・平安時代 ・坂上田村麻呂を征夷大將軍として、武力制圧をした。 ・全国的に国司に任せきりの政治であった ・わからない。 ・形状や面積、遺物について知る。 ・濠、堤防。 ・敵の攻撃を防ぐ。洪水から守る。 ・守備基地、避難場所。 ・わからない。	A 読売新聞 B 遺跡位置図 A 読売新聞 C 教科書 D 教科書 E 遺構配置図・出土遺物 F 濠の写真 A 読売新聞
展開 第2時	2 高屋敷館遺跡が戦争の時代の遺跡であるとするための根			

1	時	<p>拠を分析する</p> <p>(1) 高屋敷館遺跡出土の遺構・遺物を確認する。</p> <p>① どのような遺構が出土しているだろうか。</p> <p>② どのような遺物が出土しているだろうか。</p> <p>(2) 高屋敷館遺跡が「防御性集落」と言われていることを知る。</p> <p>① なぜ「防御性集落」と言われているのだろうか。</p> <p>(3) 高屋敷館遺跡が戦争の時代の遺跡であるとする理由を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・住居跡、濠、土塁、鉄関連遺構。 ・土師器、鉄滓、錫杖状鉄製品、木製品、羽口など。 	G 県埋文センター報告書
			<ul style="list-style-type: none"> ・わからない。 ・土塁と濠の存在から敵は侵入しづらい。しかも鉄鏃などが出土しなくても他に戦争関連の遺跡は出土している。また県内に、明らかに戦闘行為が認められる類似の遺構を持つ遺跡が発見された。 	H 三浦圭介 齋藤利男 小口雅史の各説
展 開 2	第 3 時	<p>3 高屋敷館遺跡が平和な時代の遺跡であるとするための根拠を分析する</p> <p>(1) 高屋敷館遺跡を「防御性集落」とすることに反対の人たちの理由を明確にする。</p> <p>① 「防御性」ということばの意味は何か。</p> <p>② 「防御性集落」以外の遺跡と比較して、出土遺物に大きな特徴があるか。</p> <p>③ 高屋敷館遺跡の濠や土塁は、他の時代と比較して大きな違いがあるか。</p> <p>(2) 高屋敷館遺跡が平和な時代の遺跡であるとする理由を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・敵の攻撃を防ぐ、という意味。 ・大差ない。 ・大差ない。 ・同時代の他の遺跡と比べて鉄製品の出土割合に大きな変化がない上に、宗教用の道具と推測可能な遺物も出土している。また県内の他の遺跡において、濠が防御ではなく、住居の区画として利用されていると推測可能な事例 	<p>I 八木光則説</p> <p>J 井出靖夫説</p> <p>K 工藤清泰説</p> <p>L 八戸市上七崎遺跡</p>

				が発見されている。	
展開 3	第4 時	4 高屋敷館遺跡に関する論点の明確化 (1) 高屋敷館遺跡を「防御性集落」とすることに賛成・反対の立場に立って、賛否を議論する。 ① 高屋敷館遺跡を「防御性集落」とすると、遺物・遺構の解釈にどのような整合性があるか。 ② 高屋敷館遺跡を「防御性集落」とすると、遺物・遺構の解釈にどのような矛盾が生じるか。	グループ	・土塁と濠との高低差が大きく、集落を攻撃するには足場が不安定である。また遺跡全体を囲っているため防御に適している。 ・鉄製品が少ない上に日常生活に利用された木製品が濠から出土し、なおかつ宗教用具も出土している	
		5 高屋敷館遺跡の分析から、遺跡の性格を判断する基準を探る (1) 高屋敷館遺跡に関する両者の主張から、逆の立場の理由を考える。 ① 東北地方の平安時代について、どの理由を重視すれば「戦争の時代」あるいは「平和な時代」と言えるか。		・土塁や濠を重視すると「戦争の時代」であり、木製品や宗教用具を重視すると「平和な時代」である。	M八戸市 林ノ前遺跡 N弘前市 早稲田遺跡
終結	第5 時	6 高屋敷館遺跡の分析を踏まえ、自分なりの判断の基準を探る (1) 高屋敷館遺跡を「防御性集落」「囲郭集落」とする理由をまとめる。 (2) 高屋敷館遺跡が存在した時期を「戦争の時代」「平和な時代」とした理由をまとめる。 (3) 高屋敷館遺跡を「戦争の時代」あるいは「平和な時代」の遺跡とするには、どのような理由を重視するとよいか、留保条件を付けて意思決定する。	個人		・ワークシート

(筆者作成)

【資料】

- A 読売新聞 平成7年8月30日
 - B 「蝦夷の抵抗」東京書籍 p 40.
 - C 「摂関政治と国司」東京書籍 pp. 40 - 41.
 - D 「遺構配置図」青森県史編さん考古部会編『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』青森県、2005
 - E 「出土遺物」青森県史編さん考古部会編『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』青森県、2005
 - F 「濠の写真」青森県埋蔵文化財調査センター『高屋敷館遺跡 浪岡バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書』青森県教育委員会、1998
 - G 「八戸市林ノ前遺跡出土人骨」青森県埋蔵文化財調査センター編『林ノ前遺跡 県道八戸三沢線改修事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県教育委員会、2005
 - H 井出靖夫「北日本における古代環濠集落の性格とその背景」『津軽唐川城』富山大学、2002
 - I 工藤清泰「考古学研究における境界性」『青森県史研究』No.1、1997
 - J 「弘前市早稲田遺跡遺構平面図」青森県史編さん考古部会編『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』青森県、2005
- ・HおよびIについては、表記の文献に基づき筆者が口頭で子どもに提示した。

表 2 展開 3 の実際

段階	学 習 内 容	指 導 内 容	備 考
導 入	A1 防御性集落とそうでない集落。 A2 戦争があった時代。	Q1 高屋敷館遺跡はどのような遺跡だと、研究者の間で言われているか？ Q2 防御性集落という考え方だと、高屋敷館遺跡があった時代はどのような時代だと言われているか。	・前時に学習したことを復習する。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを確認する。 ・場所を移動して、同じ立場ごとにグループとなる。 ・グループごとにワークシートに賛成の理由、反対の理由を記入する。 ・反対の立場のグループは質問を考える。 ・賛成の立場のグループが質問に答える。 ・賛成の立場のグループは質問を考える。 ・反対の立場のグループが質問に答える。 ・グループごとに、相手の立場のどの理由を重視すればよいか話し合い、ワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の題材名を提示する。 「高屋敷館遺跡を『防御性集落』とすることに賛成か反対か話し合おう」 ・賛成、反対の立場ごとに分かれてグループを編成する。 ・『防御性集落』に賛成の立場の生徒は、遺構、遺物を解釈し、その理由を考えることを指示する。 ・『防御性集落』に反対の立場の生徒は、遺構、遺物を解釈し、矛盾点を考えることを指示する。 ・賛成の立場のグループから理由を発表させる ・反対の立場のグループに質問させる。 ・反対の立場のグループから理由を発表させる ・賛成の立場のグループに質問させる。 ・自分と反対の立場の、どの理由を重視すれば戦争あるいは平和と言えるか考えるよう指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを配布し説明する。 ・前時に意思決定した結果に基づく。 ・賛成、反対それぞれのグループが同時に活動する。 ・一方が発表している時には、その要点をメモするよう留意させる。 ・授業者も要点を板書する。 ・要点のメモを活用させる。
終 結	・自分たちのグループで重視した理由以外の理由を発表されたらワークシートに記入する。	・グループごとに、重視した理由を発表させる。	・発表の要点を簡条書きでメモさせる。

(筆者作成)